

NOCSポッドキャスト

長崎の民話(長崎全県編)

台本10話分 朗読部分のみ抜粋

- 第1話 「勘作ばなし その一」(大村市)
- 第2話 「勘作ばなし その二」(大村市)
- 第3話 「勘作ばなし その三」(大村市)
- 第4話 「玖島稲荷」(大村市)
- 第5話 「絵すがた女房」(島原・南高地方)
- 第6話 「くじら長者」(西彼地方)
- 第7話 「伊王島と俊寛様」(長崎市)
- 第8話 「幸松丸」(佐世保市)
- 第9話 「亀の城」(諫早市)
- 第10話 「火さき崎」「王子の五郎」「わらしべ長者」

正文社刊「われ等の長崎県 民話伝説集」

著者 吉松祐一氏(故人)

著者略歴 大村中学校卒、長崎師範第二部、立正大学
卒日本童話協会幹事をへて、長崎市の瓊浦
高等学校教諭

昭和30年9月発行 有限会社正文社 長崎市本大工町60

第1話 勘作ばなし その一

「紺の足袋」

長沢勘作さんは、(19世紀初頭の20年間位の時期にあたりますが)文化の頃大村の城下から三里・12キロほど離れた、三浦村の日泊(ひどまり)に住んでいた侍であります。

いまでもその住んでいたところは、勘作屋敷といって残っています。鏡のように静かな日泊(ひどまり)の入江を見下ろすことができます。前までは、この屋敷の跡に、「勘作ざくら」という大きな桜の樹(き)が残っていましたが、今は梅の古木だけが残っているのです。

生まれつき「とんち」のよい人で、目から鼻に抜けるような才があったうえ、人情も厚かったので「勘作さん・勘作さん」と人々に重宝がられていたのであります。日泊(ひどまり)はおとなりの諫早藩との藩境になっていたので、田舎ながらも、二十戸ばかりの侍をおいて境を固めていました。

でも、なにぶん勘作さんは、わずか六石取りの足軽ですから、はじめ大村のお城に登城するときは、足袋を履いていくことは許されませんでした。のんき者の勘作さんは帰りがけ、鈴田の権現坂あたりまでくると、袴は脱いで、朱塗りの二本の刀に結びつけ、それを肩に担いで、テツクリ・テツクリ黒田の辻を越えてかえってきたので有りました。

でも冬になると、寒くて仕方ありません。紺色の足袋を履いて玖島城に登城すると、家老が見つけて、

「こりゃ、勘作！ お前は身分を考えろ！ なぜ足袋を履いて登城いたすか？」

「はい、こりゃ、どうもすんまっせん」

「こんたびまでは許すが、以後は許さんぞ」

「へいへい」

勘作さんは、おとなしく頭を下げていましたが、また寒い日があると相変わらず紺の足袋を履いて登城しました。

仲間の者が、それを咎めると「なに、ご家老様が、紺足袋は許すといわれたけん。わたしゃかまわんと・・・」こう言って、平気で歩いていました。

その頃、大村湾には、いろいろの珍しい魚がとれたので、それを殿様の純昌(すみよし)の召し上がりもののお膳に備えたのであります。あるときの昼の御膳についてお魚が、ひどく純昌(すみよし)公の気に入りました。

「はて、これは、大層おいしい魚じゃが、名は何というものであろうかなあ？」

お側付の侍はお料理番のところへ飛んで行って、その名を聞いてきて、「イトヨリと申すそうでございます。」

「ふむ、イトヨリ、してその字はどう書くであろうか？」

近侍(きんじ)は「はた」と困って、今度は侍のたまりにやってきて、一人ひとり聞いてまわりました。誰も首を横にひねるばかりです。そのうちに、「その字は、わけなかよ」と大声でいうものがあります。みれば勘作さんです。

「これは、三浦の長沢氏(うじ)、イトヨリとはどう書くでござろうな」

「和、和、和と、和の字を三つ書けばようがすたい」

「和、和、和でイトヨリと読めるかなあ～」と、頭を搔いていると、

「和泉(いずみ)のイ、大和(やまと)のト、日和(ひより)のヨリでござる」といいました。近侍(きんじ)もビックリして、このことを純昌公

(すみよしこう)にお話すると、「なるほど、和泉のイ、大和のト、日和(ひより)のヨリで、イトヨリか、これはおもしろい、長沢という男は面白そうな人物じゃ」とこれから、殿様のお目に止まったのであります。

お魚については、またこんなお話があります。

あるとき漁場(ぎよば)の新城(しんじょう)の漁師たちが、沖に出て、網を張ったところが、物差しのように長い「さより」に似た「たちのうお」が網に引っかかってきました。この湾で初めてとれた魚なので、「殿様に献上しよう」と、竹かごに入れて、お城へ持ってきたのです。

「なんという魚じゃろう」もとより純昌公もご存知ありません。

ちょうどこの時勘作さんが登城してきました。

「おう、勘作氏(うじ)、ちょうどよいところへ登城された。この魚の名はなんというのであろうかなあ。」勘作さんも、みたことのない魚なので、ハタと困りました。

「キンキラキンですたい」

「・・・キンキラキン・・・」

妙に思いながら殿様にも、そう申し上げると「キンキラキンと申すか、面白い名じゃなあ。」その場はそれですんでしまいました。

それから二ヶ月もしてからのことです。今度は、おなじ新城の漁場(ぎよば)から干しあげた「たちのうお」を、献上してきました。

そこで今度は、純昌公が、勘作さんを御前にお呼びになって、「勘作、この魚は、なんという名であったかなあ」

勘作さんはしばらく、ためらっていたが、「チンチクリンでございます」

「だまれ！ 不届き者、お前はこの頃キンキラキンと申したではないか。めったなことをいうと、容赦せぬぞ」

殿様のお顔はみるみる真っ赤になりました。

側にいた、近侍(きんじ)の人々も「どうなることか？」と、顔と顔を見合わせていると、

「殿、申し上げます。イカも干せば、スルメと、名前が変わりますたい。」

きよとんとした顔で言いましたので、さすがの純昌公も、思わず「ふふ・・・ふふ」とお笑いになりました。

「宝圓寺の初踊り」

年も開けて、今日は正月の二日、初登城の日であります。

玖島城の控え室の大広間の火鉢のはたには、つぎつぎと登ってくる侍たちが、あちこちに固まって座っていました。今日は侍のほかに、ご領内の名高い町人や、学者、お坊様たちも、登城することになっています。

このなかにひととき目立っているのが、殿様菩提寺の多羅山(たらさん)宝圓寺(ほうえんじ)の和尚様です。

この人は学徳高い人格者で、いつも苦虫を噛み潰したように、謹厳そのもの、阿弥陀様が生きて歩いているようなお方でした。

今日もその緋(ひ)の衣(ころも)を着た姿が、門の方から見えてくると、若侍たちは、ささやき始めました。

「よう、宝圓寺さんがみえた」

「あのお方は、いつでも、苦虫をつぶしたごと、しとらすが、あの方を、おどらせる工夫はなかろうか？」

「めっそもなか、いくら正月でも、あの生き仏さまだけは・・・」

みんなが、褒めるような、貶すようなことを、ヒソヒソと話していると、

「そりゃ、わけはござらんばい」大声で言ったものがあります。

みれば隅のほうの火鉢のそばに、胡座かいて座っている勘作さんでした。

勘作さんは、もうこの頃白足袋登城組にまで出世していたのです。

「いくら正月でも、そりゃむずかしゆうござろう」

「宝圓寺さんが踊ったら、わしらは、逆立ちしてみせる」

こう言っている間に、勘作さんは、お勝手の方にまわって、ボロ布(ぎれ)を集めて回っていました。そのうちにこちらでは、三・四人つづ、殿様の御居間(おんいま)のほうに長い廊下づたいに行つて、新年の挨拶を申し上げて、もとの広間に引き上げてくるのです。

ご挨拶もおわって、大広間に、人がぎっしり詰まったころ、突然に奇妙な叫び声が起こりました。

「おや、着物の焦げ臭かにおいのする・・・」

みな今日は、とっておきの、袴姿(かみしもすがた)で来ているので、お互いに鼻をピクピクさせて、

「ふむ、確かに何かこげとる！」中には立ち上がって、袴を払う人も出てきます。

「ありゃあ、宝圓寺さんの、衣が、緋の衣が焦げとる」

頓狂な声は勘作さんでした。

宝圓寺さんはおもわず青くなって飛び上がりました。これはご本山から拝領した一張羅の緋の衣、みれば、そばの火鉢空は、さかんに白い煙が燻って上がって焦げています。

「和尚様、その衣の裾が・・・」

「いや、後ろの方です。後ろの裾が・・・」

足を上げ、手を振って、前のほうの膝を叩いていた宝圓寺さんは、ぐるりと後ろ向きにな割りました。

「いや、袖のほうがまた、右の袖、ちがいます左のほう」

和尚様は、夢中になって、手を振り足を揚げ踊り出しました。

「ほれ、とうとうたらし、とうたらし、おうさんやれや、よろこびやれや、正月二日の初夢、おどりぞめ、それ、とうたらし、とうたらし、やれ、おうさんやれ、よろこびたれや」

勘作さんは立ち上がって三番叟の文句を歌い出し、自分も足拍子とって踊り出しました。

その二人の踊りの可笑しさに、みな人々も、思わず、「はは・・・はは・・・はは・・・」手をうち、お腹をかかえて笑いこけました。

「まづは、宝圓寺さまの、正月の初踊り、おめでたいことでございます」

きまりわるそうに、火鉢の中をながめて頭をかく和尚様の姿を見て皆が、また、「わっはっは・・・」と笑い出しました。

すっかり陽気も春になってしまいました。

玖島城をめぐる桜も咲き乱れ、とくに二重馬場のボタン桜は美しく、お城は花の雲につつまれてしまいました。

あるとき純昌公は、町の浦から、大村湾に船を浮かべられました。むこうに緑色の臼島(うすしま)や箕(み)島が、夢のように波の上に浮かんでいます。お舟の上にお伴しているのは、女中二名に、五・六名の家来、勘作さんも乗っていました。少し前頃勘作さんは六石とりから八石とりに昇進していました。

「槍先の切名でなく、口先の功名のご加増たい」と、嫉まれたほど、この頃は、すっかり純昌公のお目にならなっていたのです。

船の上には灘の生一本のお酒も積み込まれ、朱塗りの杯が、さきほどから、あちこちにまわって、間には、一杯機嫌で、お謡(うたい)の「鉢の木」を唸っている者もいます。

「さあ、今日は、みなゆっくり呑んでくれ。勘作おまえも飲む方じやろうが」

勘作さんは頭をかきながら、「へい、へい、少々は頂戴いたしますたい」と、言って杯をいただく拍子に、純昌公の懐の大きな紙入れに、目をそそぎました。

「おかみのチンチャクは、えらい結構なものでございますが、京でおもとめになりましたか？ それとも大阪で？」

側にいた家老が、

「はて、勘作は、おかしなことをいう。あれはチンチャクとは申さぬ。きんちゃくじゃ」

「いや、わたくしなどは、生まれて初めて見るチンチャクでございます。」

純昌公も笑い出して、「これ勘作、きんちゃく、いってみよ」

「はい、結構なチンチャクでございます」

「はあ・・・こりやおかしい・・・きんちゃく」

「チン、チャク、チンチャクチャク・・・」

「まだ言いおる。これ！ おまえが「きんちゃく」と言えたら、この中に入っている五十両の金とともに、この紙入れをつかわそう・・・きんちゃく」

「チン、チン、チンチャク」

「はは、。はは」

皆が腹を抱えて笑っていると、突然びっくりするほどの大声で「きんちゃく！ はいおかみ、お約束通りなかみそつくり、それを拝領つかまつります」

「はは、また勘作めに、いっばいくわされた。は、は、はは・・・」

船の上にはまた爆笑がわきあがり、ひとゆれゆれて、船は寺島の方へ進んでいきました。

第2話 勘作ばなし その二 「あかぎれの殿様」と「天保銭一枚」

「あかぎれの殿様」

純昌公はなかなかの名君で、この殿様の時代にすっかり大村藩はお金持ちになってしまいました。

明治ご一新のとき、この藩は、奥州征伐にも加わって手柄を表し、明治二年京都の二条城において、維新の手柄のあった藩に論功行賞(ごほうび)が下ったとき、薩摩、長州の二十万石、土佐の四万石に続いて、三番目に玉(ぎょく)の御声(おこえ)がかかったのは、実に大村の三万石でした。

このような働きのできる財政のもとを築いたのがこの純昌公でしたので、俗に「あかぎれの殿様」と言われていました。

自分から手足にあかぎれのできるほど、働かれたという意味です。だから仕事にはなかなかやかましいほうでした。

この純昌公が、二の丸(居間のボートレース場のあるお城の裏側)に、隠居所を作ることになりました。そこで、ときどき人夫たちがお庭を作っている現場に現れて、

「あの木はここへ植えろ」

「石はあそこに立ててはいかぬ」と、口やかましく、小言をいいました。

これには土工(どころ)や植木屋もすっかり弱り切っていました。勘作さんは、このとき現場監督を仰せつかって毎日来ていましたが、ある日、あまりのことにそれを見かねて、

「わりゃ、なんばやかましゆう言うるととか、帰れ、バカ」と大声でわめきました。

真っ青になったのは家老たちです。

「殿にあんな雑言をはいて、勘作はいまに打ち首。わしらもお役目不行き届きとあって、どんなお叱りをうけるかもしれない」と、殿様がその場を黙って引き取られてから、勘作をそっと物陰に呼んでなじると、勘作さんは、

「ありゃ、上小路の徳松でしたばい。殿様があぎゃんところへ来られるもんですか」と平気な顔をしていました、さすがは名君純昌公、その後なんのお叱りもありませんでした。

「殿様を馬鹿者扱いしたものは、勘作さんばかりばい」と噂されました。

「天保銭一枚」

そのころは藩と藩との関係がやかましくて、境目になっているあたりは、領地あらずい絶えませんでした。日泊(ひどまり)に続く今村は、おとなりの諫早藩との境目になっていた土地です。この境目にあたっている畑の真ん中に、大きな石が転がっていました。諫早藩にあたる方の人々があるとき、「こん石ば、ひとつうちの殿様のお庭の庭石にしゅう・・・」と、朝早く大八車をひいてきて、五・六人がかりで載せようとしていました。

ビックリしたのは、今村の百姓たちです。さっそく勘作さんのうちに飛んで行きました。顔を洗っていた勘作さんも急いで、そこに行ってみますと、この始末です。

「こら！ その石は持って行っていかんばい。このへんは、大村領じゃもん」

「なに、諫早領たい。わが領のものを運んだってどうわろう」

「いかん。そりゃ、盗人ぞ」百姓も黙っていません。

「どうわろうか。わが石じゃもん」

なかなか争いはやみません。しばらく黙って見ていた勘作さんが、

「よか、そんならしかたなか、その石ば玖島城までもて行くことも出来ん、天保銭一枚でうち売ろうだい」と言い出しました。

これを聞いて、天保銭一枚なら安かこと、買おう、というので、

「いかにも承知した。そら、天保銭一枚・・・」と諫早の人々が、お金を出そうとすると、勘作さんはすかさず手をあげて、

「ありゃ、待った。自分のものを人から買うっちゅうこたあ、あるめ。それがここは大村領の証拠、都合によってこの石は売ることやめた」と言って、「大村領」と筆太に書いた紙を、その石に貼り付けて、さっさと引き上げてしまいました。

なにせよ、日泊(ひどまり)あたりは、藩境のいざこざはこのほかにも絶えませんでした。

あるときおとなりの本野村(諫早藩)の大渡野(おおわたの)のものが、この無尽の講に加わっていました。そして落札はしたものの、金がないというので、後の掛け金は、どうしても納めません。また、この金の取り立て方を、勘作さんに頼んできました。勘作さんは今日は、お城が非番で休みであることを幸に、大渡野(おおわたの)まで歩いて行きました。その百姓家に行ってみると、土間には大きな米俵を積んでいるのです。

「ここにはこぎゃん、米俵ばつんどっじゃなかか」

「そりゃ、殿様へあげる上納米じゃけん、どうにもなりまっせん」

「あの家の屋根の上に積んどる俵はなんじゃろか」

「ありゃ、麦俵ばってん、うちんもんも、麦ぐりゃ食わんと、死にますたい」

勘作さんは、前の田の中に転がっている大きな石に目をつけました。「あの石なら、もろうてよかろう」「石ならかまいっせん」

「よし、あれを、しばらくばならん。竹四本と、しめ縄ば、くつじょ」
こう言って、青竹四本と、しめ縄を持ってこらせると、その大石のぐるりの四方に、青竹を四本たて、それにしめ縄をはりめぐらして、白紙に、「このところ大村丹後守の領分なり」と書いて、その石に貼り付け、「いつどき預けとく」こう言い残し、帰って行きました。やがてこのことは本野村の庄屋の耳に入りました。

「あすこが、大村領とはけしからん」と、飛んでいったが、百姓に話を聞くと、すっかり事情がわかっていました。

庄屋はあわてていままでとどこっていた掛け金を、耳を揃えて日泊の方へもってきました。

五月になって、梅雨の雨が毎日毎日しとしととけぶりながら降り続きます。勘作さんはうなぎ釣りが大好きで、鈴田川の川尻へいつも、ウナギ釣りにでかけました。

「今日は一つ、場所を変えてみよう」こう思って、釣竿を担ぎ、籠を持って、松山の津水川の方へ行きました。

川の中にはいって、しきりにウナギの穴を探っていると、川岸を通りかかった人たちがこれを見て、「こら、よその藩のもんな、来て釣っちゃいかんぞ」とどなりました。

勘作さんは振り返って、「この雨でなあ、鈴田川のウナギが、大層流れこんできとるけん、釣りよとたい、ようみとんなつつせ」と言って、なおも穴を探しはじめました。

そうして大きなウナギがかかると、「わりや、大村んウナギ」と言って、自分の腰に吊るしている籠のふたを開けて入れ、小さなウナギが釣竿にかかると、「こりや、諫早んウナギ」といって、チャポンと川の中にほおりこみ、大きなウナギは「大村のウナギ」といって籠の中に入れ、小さなウナギは「諫早んウナギ」と言って、チャ

ポンと川の中へ。こうしてみている間に、籠いっぱい、ウナギを釣って、さっさと家へ帰って行ってしまいました。

第3話 勘作ばなし その三

「清正公(せいしょうこう)拝領の槍」と「日泊りのつけあげ」

「清正公拝領の槍」

日泊の若者と平松の若者と喧嘩したことがありました。どうも日泊の者のほうが分が悪かったので、勘作さんが間にたって詫びをいれることになりました。

平松の若者たちは、いきり立って日泊郷におしかけてきました。勘作さんは、浄土寺にみんなを集めて「詫びの印に、一斗ざるに真珠を入れてつかわし候」と書きました。

平松の若者たちは、目を丸くして、喜び、その証文をもらってかえりました。

大村湾は昔から真珠の名産地ということが天下に響いていたからであります。

いよいよ受け取りの日になると日泊の浄土寺に、また平松の若者たちが、ぞろぞろとやってきました。

勘作さんの大事そうに抱えてきた籠の中には、いびつに歪んだ真珠の玉が、たった三粒入っていました。

「なるほど、これでも一斗ざるには違いなか」若者たちは、ブツブツ言いながら帰っていきました。

勘作さんのうちの前は、細い諫早街道が今村のほうへ通っていました。

夏になって、家の垣根には、赤や紫の朝顔が咲いて、下の段々畑の向こうには、日泊の湾の青い潮(うしお)が目にも染みるようにみえるのです。

今日は非番なので、勘作さんが家の前に畑に出て、せっせと草をむしっていると、向こうの方から腰に大きな赤鞆の大小を差した、ひげむしゃの侍がやってきました。

「おいこら、諫早はどっちの方へ行くのだ？」

立ち止まって、横柄に道を尋ねました。

勘作さんは癩に障ったので、足を蹴飛ばすように前の方にあげて、「あっちのほうたい」

するとコチラは、よっぽど気の短い侍だと見えて、

「おのれ、武士に向かって、足を上げて道を教えるとは何事だ。無礼千万。手討ちにいたす、その場へ出ろ」

こう言うが早いか、例の赤鞆の太刀を、すらりと抜き放ちました。

びっくりした勘作さん。

逃げることもならないので、とっさに家の方を振り向いて、大声に「おい！ 仲間(ちゅうげん)の三平、清正公拝領のあの朱塗りの槍をはやく持参せろ！ 真剣勝負のお相手をいたす、おい、早く三平、槍を持って来い」

今度は相手の武士が肝をつぶしました。清正公拝領の槍持ちとあれば、相当の使い手に違いない。滅多なことは出来ない、と思って、あわてて刀を下げたまま、今村の方をむいて、ドンドン逃げ出してしまいました。

後ろ姿を見送った勘作さんは、大きな息をついて、「ああ、よかった、いきなり赤鞆を抜かれたときは、まっふたつにいかれると思って、ヒヤッとした」と、独り言を言って、なおも胸をなでおろしました。

もとより清正公拝領の槍もデタラメ、仲間(ちゅうげん)なんかいませんでした。

勘作さんはカラキシ剣道は下手だったのです。燃えるような太陽を浴びて、庭に向日葵が風に揺れていました。

大村の玖島城は、そのころ純昌公が偉かったので、掟もなかなかやかましくありました。登城の時間なども決まっていた、遅刻の者は家老のお叱りを受けることになっていました。

今日は、朝からのドシャ振りです。それにときどき稲光が、ピカッと光って、カミナリが鳴り出しました。

「今日も、カミナリがお城の森におちて、松の木がまっふたつに裂けた」こんな噂も、とりどりです。

「まだ登城しとらんごたるが、この雨じゃ、さすがの勘作も弱つとるじゃろう」こう城内の控部屋で噂をしていると、昼頃になって、勘作さんがずぶ濡れになって現れました。

「やあ、長沢氏(うじ)、えろう、おそうござったな」

「いや、それがさ、途中黒田の辻で、カミナリを捕らえよったら、おそうなった」

黒田の辻とは、日泊から、鈴田に下る小高い丘で、目下に大村湾が絵のように見下ろされるところです。

「そりゃ、めずらしか。そうしてそのカミナリはどうなされた」

「一升徳利につめて、おいてきた」

「カミナリの食べ物はどうされた、いくらカミナリでも何も食べないと、死んでしまおうが」

「智恵のないことをいわれる。へそをやってきた。カミナリがへそを食うことぐらいは、日泊では、三歳の子供でも、しっとりすばい。はは」

「はは、はは」ご家老を始め、みなお腹を抱えて、大笑いで、その場は幕となりました。

「日泊のつけあげ」

「お上に申し上げます。わたくしがただいま登城の途中、鈴田川の川尻までまいりますと、いく百ともしれぬ鴨がおりました」

「なに、いく百ともしれぬ鴨。それは耳寄りの話じゃ。それ鴨狩にでかけよう、仕度をせろ」

狩りずきの純昌公は、さっそく四、五名の家来に仕度をさせ、自分は馬で、二十馬場から本小路をとおり、鈴田の方へ出かけました。

川が海に注ぐあたりには、葦がいっぱい生い茂っています。

家来たちは、鴨がみづかり次第射殺(いころ)してやらんと、弓を右手に握りしめています。

「して、勘作・・・その鴨はどこにいるか？」

「お上、あれでございます。あそこ」

勘作さんの指さすところは、広い広い大根畑です。太い大根が、あたまに青い葉を抱いて、によきによき太った白い肌を畑の中に表しています。

「・・・何。あれは大根ではないか？」

こちらは、頭をかきながら、

「あれは鴨ではございっませんでしたらうか。実はこの間、御殿においては、鴨料理のお振る舞いがあるというので、楽しみにしていましたが、わたくしのお膳に付きましたのは、あればかり、ははあ、これが鴨というもんかと、今の今まで思っておりましたたい。はい」

本小路の入り口に、原八左衛門という人の白壁で塗った立派なお屋敷がありました。

禄高は八百石取りの御馬廻で、身分は大分違いますが、登城する時、道連れになることが多く、勘作さんとは、大の仲良しでありました。

「勘作氏、おくんちによらんか、ごちそうをすかわすぞ」

「なんのごちそうでございまっしょ」

「エビのつけあげ(てんぷら)をくわせる」

「そりゃ、ありがとうございます。つけあげは大の好物で」

その日になると八左衛門さんの家の御門からうちに入りました。山茶花の花の散りこぼれている植え込みがあって、お池まである風流なお庭、茶室作りの部屋に通されました。

「勘作氏(うじ)、ゆっくりなされい。約束のつけあげが、もうやがてまいる」

こう言ううちに女中が、お銚子とともに、山盛りに、エビのつけ揚げをお皿にもって入ってきました。

「これはこれは。頂戴いたしまっしょ」

勘作さんは箸に挟んで食べ始めましたが、それが辛いのがからくないの、よくみれば間に赤い胡椒がいっぱいまじっているのです。勘作さんは、目を白黒させて、はては涙をボロボロこぼして食べています。

「どうじゃ勘作氏、エビのつけ揚げはうまかろうが」

八左衛門はニヤニヤ笑って見えています。

こちらは大の負けず嫌いですから、

「こんなうまいつけ揚げは、生まれて初めてでござる。時に、八左衛門殿、日泊にも大きな海老が取れますが、一度遊びにおいでくださいませんか」

「うむ、日泊にはまだいったことはない、それでは行くでしょう」

「ありがとうございます。日泊のエビは大村のよりもおおきうござるぞ。そのつけあげは、また郷の自慢ものでござる」

八左衛門さんも鈴田から、黒田の辻をテクテクと越えて、日泊までやってきました。

勘作さんのうちは藁葺きながら、大きな構えでした。

やがて大きな皿にエビのつけ揚げを入れて、八左衛門さんの前にもってきました。

「こりゃ、うまかるごたる」八左衛門さんは箸をつけて、一口食べるとたんに、プープー吹き出しました。エビのつけ揚げといっしょに赤い胡椒を油であげて、山のように積んであるのです。

でも食べ始めてやめるわけにもいかず、

「勘作氏、日泊のつけ揚げはかろうござるな」

勘作さんは、すかさず、「いや、エビのつけ揚げはどこのものも辛いことに、決まっておりますたい」

八左衛門さんはこれには一言もなく、みちみち口をとがらかして、フーフーフーフー吹きながら、大村へ帰っていきました。

勘作さんは、このような面白い人で、一生の間いたるところに明るい空気と笑いを周囲にまき散らして暮らしました。

第4話 「玖島稻荷」

大村の八重桜で有名な大村神社の本殿の後ろ、杉の木にかこまれて大きな楠の下に、玖島稻荷の祠(ほこら)があります。この祠は、もとは西大村の三城(みき)の城跡にあったのをわけたものです。

さて一五七〇年・元亀元年七月の二〇日のことでした。三城が武雄の後藤貴明、諫早の西郷純堯(すみたか)、平戸の松浦隆信(たかのぶ)の連合軍に、不意を襲われたのは有名な話です。戦のおこりは後藤貴明は、もともと大村家に生まれ、ここの城主になろうとっていました。

ところがにわかに武雄にやられて、島原から純忠が迎えられて、城主になったので、不平にたえず、大村領内を自分の手に握ろうとたくらんで、近くの藩に加勢を頼んだのです。

この時松浦勢は、千艘(せんそう)からの小船にのって、井野浦の瀬戸から、大村湾に入り、海上から迫り、貴明と純堯は、南北から三城を挟み撃ちにしたのであります。

このとき城内には、純忠がたった七人の家来とともに残っていました。あとは女や年寄り、子供など、あわせても七〇人そこそこのものでした。

寄せ手は一七〇〇人からの大軍です。ただ「ひともみ」と、三城の麓に迫りました。

しかし、貴明が馬をすすめて、城に近づいてみると、城にはいく千本となく旗が翻り、あちらの石垣、こちらの森蔭には、みっしりと隙間もなく、よろい・かぶとに身を固めた兵が、蟻のように固めているのです。

「はて、三城は、物見の兵のいうところによると、たしかに手薄なはずだったが」と、貴明は目をこすって、しげしげとうち眺めました。

しかし、よく見ると、その旗や鎧武者と見せかけたのは、この城の後ろの森に茂っていた草や木で、それはみんなこの城に住んでいる、四郎左衛門という古狐の仕業だったのです。

この狐は古くからこの城の森に住んでいたもので、何十匹という子供や、幾百という子分を持っていました。「三城あやうし」とみるや、すぐ子分や子供孫どもを駆り集め、あるときは、敵の陣に入り込んでひっかきまわし、あるときは斥候兵の役になって、敵軍の様子を調べて、純忠に報告したりしたものです。

富永弥助という者がありました。

純忠のご機嫌を損ねて、お目通りもできぬ身分になっていましたが、四郎左衛門に教えられて、鈴田の方から攻めこんできた大渡野軍兵衛の陣屋へ紛れ込みました。軍兵衛は、本野村の大渡野に住む豪傑で、そのころ「おおわたのぐんべい」といえば、泣く子も黙るほど恐れられていた大将でした。

弥助は、降参をした真似をして「私が三城の方へ道案内しましょう」というと、軍兵衛は喜んで、弥助を先頭にたたせ、自分もあとから馬にのって進んで行きました。武部郷の昼も位ほど木の茂った細い坂路(さかじ)にかかったとき弥助は、いきなり軍兵衛の脇腹を刀で突きさしました。

「おのれ。はかられた、こんつくしょう」と叫びながら、軍兵衛は馬からどっを落ちてしまいました。

「軍兵衛うちとり」の噂で、敵陣はにわかには浮き腰になりました。兵たちは諫早の方にどんどん逃げ出したのです。

そのうち三城の方には、おいおい兵があつまり、松浦の船も、白島の沖で焼き討ちにあったという噂がたちました。

「この合戦、勝ち目なし」と見て取った貴明も、むなしく兵をひいて、武雄の方に引き上げてしまいました。

純忠は弥助の手をとって、喜びました。軍兵衛の打たれた所は、いま誰が建てたか、自然石の大きな碑が、苔にうづまってたっています。

さて四郎左衛門狐もおしいことに、この日の合戦で足を名誉の負傷して、不自由になってしまいました。

しかし、皆から「四郎左衛門殿」と敬われるようになり、こののちも三城を守っていました。殿様が行列を整えてよそにお旅立ちになるときは、自分もたくさんの子分をふれて行列しておともしました。それも家老格になって、袴をつけ、籠に乗って出かけました。

子分の狐どもも、それぞれ槍持ちや、挟箱持ちに化けて、ぞろぞろ行列に加わったものであります。

純忠の子の喜前(きぜん)公が、いまの大村神社のところにあたる、玖島城を築いたときは、四郎左衛門の住処は、いまの玖島稲荷のところに移され、三城には、分家の祠を残すことにしました。

明治になってから、しょうのうを取るため、大楠を切り倒そうとすると、神主さんの枕元に、白髪 of 四郎左衛門が現れて「祠は決してこわしてくれるな」と言ったそうです。そこでこのお稲荷さまは残っていて、お祀りがにぎやかに行われています。

第5話 「絵姿女房」

むかし一人の貧乏な男が住んでいました。

もう年も暮というのに、餅をつくことも出来ません。

「どうやって、正月をむかゆうか」と、寝転びながら腕くんで考えていました。

「そうたい。正月には、どのうちも、モロモキとツルシバのいるけん、あれを山からとってきて、町に売りに行こう」、こう独り言を言って、釜を持って山に出かけました。

そうしてたくさんとったので、それを縄で縛って、肩に担ぎながら、

「モロモキいらんのう！ ツルシバいらんのう！」と大声で叫んで、町の家を一軒一軒ふれあるきました。

ところが、どの家も一軒も買ってくれませんが、一日中ふれまわって、夕方になったので、「しかたなか、きょうはもうかえろう」と、帰るうちに、ふと橋の上をとおりかかりました。

「正月さまのモロモキとツルシバを竈に燃やしてしまうのも、もったいなか、いっそのこと竜宮にあげもうそう」こう言って、橋の上から、海の中に投げ入れてしまいました。

そのまま家に帰り、翌日もごろりと横になって寝ていると、トントンと外から、戸を叩くものがあります。

戸を開けてみると、いままでいちども会ったことのない、立派な若い男です。

「私は、竜宮の竜王さまのお使いのものです。竜王様が、あなたにお礼がしたいとおおせですから、おむかいにきました」、のんき者の男は起き上がって、その若者の後についていきました。

昨日の橋の上までくると、若者はそこから海の底にもぐっていきましました。二人はいく時間も歩いたようでした。竜宮につくと、門は赤い珊瑚で出来ていました。陸上では見たこともないような、珍しいご馳走を、たくさんにいただきました。

そうして帰りには、顔の雪のように白い乙姫様をお嫁さんにして帰ってきました。

あまりにお嫁さんが美しいので、男はいつもお嫁さんの側から離れませんでした。でも、いつまでも働かないでいるわけにもいかなないので、畑に行くことにしましたが、その間も、お嫁さんに離れることがいやだから、絵描さんに、その姿を一枚の紙に描いてもらいました。

貧乏な男は、それを大事に懐に入れて鋤(くわ)を担いで、畑に上って行ったのです。そうして割竹にその絵を挟んで、畑の真ん中に立てておいて、一鋤うってはそれを眺め、二鋤うってはそれを眺めして、耕していました。

ところが、昼頃になると、にわかにな竜巻風が吹いてきて、その紙はヒラヒラ飛ばされて遠くの方に飛んで行ってしまいました。

この紙は殿様のお城に高く舞い上がって、御殿のお庭に飛び込んだのです。殿様はこの時丁度、お縁側に立って、盆栽のように立派に手入れの行き届いたお庭を見ていました。ちょうど萩の花も咲き乱れていたところでした。

すると一枚の紙が、蝶のようにヒラヒラ目の前に飛んできたので、家来にそれを拾わせました。

家来の持ってきたその紙をみると、女の絵姿が描いてありました。殿様はそれを手にとってじっと見つめて、「世の中には美しい女もあるものだ。絵でこれほどだから、実際はどんなに美しいのだろう」と思い、

「この女を探してまいれ」と、家来にこういつけました。

家来たちはさっそく手分けして、領内を探しまわったのであります。

貧乏な男は、三日ののちには、殿様の御殿に呼び出されたのです。

そうして、

「あしたの昼までに、小鳥を一石六斗持ってこい。もしそれができなければ、おまえの女房を、御殿に奉公にあげよ」

こう言い渡されました。

貧乏な男は、青菜に塩かけたように萎れて家に帰ってきて、そのことをお嫁さんに話しました。

「心配いりませんよ」

こういって、お嫁さんは、やがて鳩を二羽捕らえてきました。男はそれを風呂敷に入れて御殿へ持っていきました。

「はい、鳩 八斗、鳩、八斗。これで一石六斗の鳥でがす」といいました。

殿様は、顔をしかめて、

「よし、そんなら、明日は、ヒューヒュードンドン、袖かぶる、えいや、はっちやれ、これたまらん、というものをもってこい」

と言いました。

男は家に帰って、このことをお嫁さんに話すと、お嫁さんはしばらく考えていましたが、

「しばらく待っていてください」と言って、そのまま家を出て、橋の上から海の中へ入り竜宮へ行きました。そうして三つの箱を抱えてきました。

男は翌日、その三つの箱を大事そうに抱えて、御殿へ上がったのです。

「あやしい箱だ」

こう言いながら、殿様を初め、たくさんのご家来が見ている前で、まず男は、一番上の箱の蓋をとりました。すると、たくさん的小人があらわれて、手に手に、小さな箱と太鼓をもって、はやしたてました。

まるで、田植え祝いの浮流(ふりゅう)の囃子のようにでした。

「はい、これがヒューヒュードンドンでございます」

男はこう言いました。

みんなは珍しがって、ニヤニヤ笑い出しました。

男が二番目の箱の蓋を開くと、何千という蜂がブーンと一度に飛び出しました。そうして殿様はじめ家来たちの顔に飛びつきました。みなはおもわず着物の袖を顔から引っ被って、それを払いのけようとしてました。

「はい、これが袖かぶる、お次は」

こう言って、男が三番目の箱を開けると、またもたくさん的小人が飛び出しました。

今度はみな白はちまきにたすきがけで刀を抜いて、

「えいや、はっちゃれ、えいや、はっちゃれ」

と、殿様はじめ家来たちに斬りかかりました。みんなは「こりゃたまらん」、とって逃げ出してしまいました。

貧乏な男は、家に帰って、それから、美しいお嫁さんと二人、仲良く暮らしました・・・とき。

第6話 「くじら長者」

むかし西彼杵半島の西の方の平島という島に、与五郎という人が住んでいました。家は大層貧乏でしたが、生まれつき肝っ玉の大きな人で、「一生のうちにはなにか、人を驚かせるような大きな仕事をして、大儲けしたいものだ」と、いう夢を抱いていました。

あるとき、近くの松島の沖に、鯨が潮を吹いて通るのを見て、「よし、あの鯨をひっ捕らえてやろう」と、小船にのり、モリを持って出かけました。モリを投げつけたがなかなか当たりません。やっと、二・三本鯨に突き刺さりましたが、鯨は相変わらず勢いよく潮を吹いて、沖のほうへ泳いで行ってしまいました。

「もっとよい、くじらとりの仕方はないものかなあ」と、毎日寝転んで考えていましたが、ある日のこと、ふと天井をみていると、一匹の蜘蛛が網を張っているのです。やっと網を貼り終わったところ、蟬が飛んできてその網にひっかかってしまいました。

「しめた。あのやり方を鯨取りにやってみるんだ」

と思い、与五郎は村の人々を集めて相談し、大きな丈夫な網をこしらえました。

そして、その網を海に張っておいて、沖の方から小船で、鯨を追ってきました。そうしてその網にひっかけて、生け捕りにしたのです。

この仕方を網組捕鯨法と名づけました。

この仕方はあたりにあたって、与五郎は、毎年幾百という鯨を取りました。鯨が一頭取れると、七浦が潤うといわれています。与五郎はたちまち大金持ちになってしまいました。

盆栽のような枝ぶりのよい松が、美しく生えている松島の西泊の海岸に、見事なくじら御殿をたてました。

鯨を買うために、この釜の浦の港には、いつもたくさんの船が、出はいりしました。

この頃から、長崎の出島のオランダ人とも貿易を始めましたので、ますますお金持ちになって松島与五郎の名は、日本の長者番付にも乗るようになりました。

ときどき金のマスに小判を測って、大村の殿様に差し上げました。大村家では、かれを侍にとりたて、深沢という苗字までさづけました。

与五郎は、松島にわざわざ大阪から歌舞伎芝居の一座を呼んで、村の人々にも見せました。

そうして自分はいつも酒盛りをしていたのです。

「沖にドンドンある瀬がござる 大阪芝居の寄せ太鼓」

という、盆踊りの歌が、遠くの国々にまで歌われるようになりました。

ある夜の事です。

与五郎の枕元に、一匹の鯨が現れて、

「私は、明日子供を連れて、松島の沖をとおります。まだお腹にも子供が一匹は入っていますので、この子が生まれるまでとらんようにしてください」

と涙ながして言ったかと思うとパッと消えてしまいました。

その翌日の夕方、浜には二匹の鯨が上がったという噂が立って、騒がしくありました。一匹は子クジラだったのです。どうしたものか、それかパツタリと鯨がとれなくなっていました。

与五郎は、

「よし、おれがとりに行ってくる」

と言って、手下のものをつれて、船にのって出かけました。

船が玄界灘に出て潮を高く吹き上げている鯨を見つけたので、「それっ」と追いかけていくと俄に西風が強くなり、見る間に船は大波にまきこまれてしまいました。

与五郎はそのとき六〇歳、正徳六年六月六日のことでした。

村の人々は、与五郎のために、立派な墓を作ってやりました。あれほど立派であった鯨御殿も、人がすまなくなると、だんだん荒れ果てて行きました。

でもここには沢山の金銀がうめてあったといわれ、いまでも月の明るい夜など、この場所にくると、与五郎が、なにごとか、妻とボソボソ話をしている声が聞こえるそうであります。

第7話 「伊王島と俊寛さま」

承安(しょうあん)から治承(じしょう)にかけてのことです。そのころは平家の全盛の頃で、平清盛は「飛ぶ鳥も落とし、入日(いりひ)も扇で招き帰す」という勢いでありました。天下の大方は皆平家一門の領地となっており、おしまいには後白河法皇さえも、気に入らぬことがあると、一つの御殿に押し込められてまつという、わがままぶりでありました。

少しでも平家の悪口を言おうものなら、京都の市中には、「かぶろ」という子供をあちこちに放っておいて、すぐそのことを清盛に告げさせたのであります。そこで、すぐその者は、捕らえられて、牢に入れられてしまったのです。

「どうかして、あのわがままな清盛を除かねばならぬ」

と考え、平家を滅ぼそうとかかったのが、俊寛様であります。

俊寛様は、その頃法勝寺という大きな寺のお坊様で、先祖は村上天皇から出ていましたので、家柄もよく、十二万石の寺領を持っていて、京都ではなかなかの勢力がありました。

大納言成親(なりちか)、平判官康頼(たいらのほうがんやすのり)、丹波少将成経(たんばのしょうしょうなりつね)、お坊様の西行、多田蔵人行綱(ただくらんどゆきつな)などは、その同志でありました。

滅多なことをして人目にかかるとは大変ですから、学問を調べていると見せかけ、俊寛様の別荘の東山の鹿ヶ谷(ししがたに)にひそかに集まって、計画をめぐらしていたのです。

ところが、なにぶんにも、平家の勢いが強いので、同士の中の一人の多田行綱は、俄に怖気づいて、「今のうちに自首したら、

殺されずにすむかもしれない」と思って、この計画を、清盛方に告げてしまいました。

火のように怒った清盛は、まず近くに住んでいた西行を引っ捕えしました。西行は豪胆な人で清盛の目の前で、罵り続けたので、忽ち口を引き裂かれて、殺されてしまいました。

続いて仲間は次々に捕らえられ、まず成親卿は備中に流され、俊寛、康頼、成経の三人は、九州の南の鬼界島(きかいがじま)に流すと、触れられました。

治承元年五月、三人は瀬尾三郎兼安(かねやす)に連れられて、いよいよ福原から船に乗ったのであります。

それから周防灘を押し渡り、筑前の小倉に上陸して、それから陸の道を通って嘉瀬(かせ)の庄につき、暫くとどまりました。

表面は薩摩の南の方に行くと言っておいて、兼安はわざとこの庄に連れてきました。ここが成経の妻の父の、宰相教盛(のりもり)の荘園だったからであります。ここはいまは佐賀市外にあたり、米どころですが、そのころは嘉瀬津(かせつ)とよばれ、有明海の船着場だったのです。

でも、もとよりここに長く留まっていることも出来ないのもので、またこの港から船にのって有明海をよぎり辿り着いたのが、今の長崎港外の伊王島でありました。

その頃までは、もとより長崎の港も開かれておらず、荒れ果てた半島で、ことにこの島は、鬼の住むとまで言われた未開の島でありました。

海岸には白波が高く打ち寄せ、熱帯植物のアコウの樹が、しげりっぱなしに茂っていました。成経と康頼は「早く京都に帰れるように」と思って、日頃から信仰していた熊野権現の小さな祠を作って、毎日そこへお参りしました。

俊寛様は、もとより生まれつき、肝っ玉のおおきな豪胆な人でしたので、そのようなことはしませんでした。

嘉瀬の庄からは、荒木乗観(じょうかん)という者が、成経卿の着物や、食べ物などを持って、時々はるかに、この島までやってきました。今でも嘉瀬には、法勝寺という寺があり、このようなことを記した書き物や(文政年間に書かれたもの)俊寛様を祀った祠もあるのです。

翌治承二年の七月のことです。

珍しくも伊王島の沖合に、立派な船が現れました。それは中宮にお子様(後の安徳天皇)が御生まれになるというので、その安産を祈るため、この島に流された人たちを、京都に呼び戻すことを知らせる便がのっている船だったのです。

三人は天にも登る思いで、その赦免状を見てみますと、康頼、成経の名前ばかりで、俊寛の名前は書いてありません。

かわいそうに使いの者は、二人を船に載せ、そのまま錨を巻き上げようとしてしました。俊寛様は、船の友綱(ともづな)にすがりつき、泣き叫んで頼みましたけれども、船はそのまま帆を張って、沖の方へ出ていってしまいました。

俊寛様は、浜辺の岩にしがみついて、足摺りして叫びましたけれども、やがてその声も絶え、波の上に聞こえるものは、浜千鳥の鳴く声のみでした。

それからいく年も月日は流れました。日頃京都で俊寛様に可愛がられて、仕えていた有王丸(ありおうまる)は、その行方を尋ね訪ねて、しまいに深堀からこの島へ小船で渡ってきました。

そうして浜づたいに歩いてくると、向こうの方から、髪やヒゲは伸び放題にし、ところどころ海藻でつづったボロボロの着物を着

た者が、手に魚を下げて、歩いてきます。有王丸は声をかけました。

「もしも、この島に俊寛様という偉いお坊様はおいでになりませんか？」

向こうの者は立ち止まって、じっと有王丸の顔を見つめていましたが、

「おう、おまえは、有王丸・・・」

こう唸って、そのまま砂の上にバツタリ倒れてしまいました。

「さては、これが、俊寛様であったか」

有王丸はびっくりしながら、その身体を抱いて、近くの庵(いおり)の中に、担ぎ入れました。庵といっても、風をよけたほろ穴に、入り口には木を立て、上を茅(かや)で覆って、雨露を凌いでであるに過ぎません。

有王丸は、心をこめて介抱しましたが、四月二二日、ついに俊寛様は、この庵のなかで目をつむってしまいました。

有王丸は船津のうえの武庫山上(むこさんちょう)に、俊寛様の亡骸(なきがら)を葬り、かたわらに一本の松の木を植えておきました。

このお墓は、今もそのまま残っていて伊王島小学校の運動場になっています。

北原白秋という歌人が、昭和十年にこの島を訪れ俊寛様の歌を詠みましたので、その歌碑も、墓の傍らにたっているのであります。

ここははるかに紺碧の五島灘を見晴らし、絵のような美しい眺めであります。墓の下の円通寺には、いろいろの書き物や、俊寛様の画像も残っています。

お寺の庭には、成経、康頼が熊野権現を祀る時、御幣替わりにしたという、ゆかりの浜木綿の花も咲き乱れているのであります。海を超えたのも半島の深堀には、有王塚もあるのです。

第8話 「幸松丸(こうしょうまる)」

佐世保駅から出る松浦線の左右の駅の東のほうに、志賀神社と呼ばれるお宮がありますが、そのお宮の竹やぶの中に、草にうづもれて、五輪塔がたち、さみしく虫はすだいています。

これは、昔勢いの強かった大智庵(だいちあん)の城主、松浦(まつら)丹後守(たんごのかみ)政(まさし)のお墓であります。

時は、ちょうど後土御門天皇(ごつちみかどてんのう)のときにあたっています。政はここいら一帯を領していましたが、狩りが大層好きでありました。そこで、「今日も山狩をしよう」というので、赤崎の近くの石岳(いしだけ)に行くことにしました。まず足軽どもを野に放ち、遠巻きにして、枯野に火を放たせ、音火矢(おとひや)を上げて、獣を駆り立てさせました。

驚いて逃げ出す、うさぎ、きつね、いのしし等を、こちらから弓で射殺すのです。

ちょうどその日、丹後守の面前に、一匹の大猪が猛り狂って走ってきました。政は馬の上から、狙って矢を放ちましたが、その矢はそれてしまいました。

「しまった。しくじった」

と舌打ちしていると、同じように馬に乗って側にいた山田四郎左衛門が、「御免」と叫んで、矢を放ちました。今度は狙い違わず、その首にあたって猪は草むらの中に、もんどりうって倒れました。予てから嫌いな四郎左衛門のことですから政は、

「四郎左衛門、無礼であらうぞ、それくらいの腕前で」と皆が見ている前で、さんざんに罵りました。

翌日から四郎左衛門は、プツリと、お城にも出ず、家に籠っておりましたが、ついに、弟の文左衛門を呼び寄せ、二人で海を渡って平戸へ行きました。

そうして平戸の殿様の肥前守弘定(ひろさだ)にあって、「殿が、大智庵をお攻めになるときは、必ず私達兄弟が、道案内をいたします」と言いました。

その頃、佐世保と平戸は、同じ松浦一党でありながらも、大層仲が悪く、互いにすきを狙って、合戦を仕掛けようと構えていたからであります。

まえ延徳三年にも政は島原の有馬と結んで、平戸を攻めたことがあったのです。

弘定はよろこんで、大野源五郎を大将とし、山田兄弟を道案内にして、海をわたって、大智庵城に攻めこませました。山田兄弟は城の様子をよく知っているので、まず城内に入り込み、火をかけて、この火の手を合図に、「わあっ・・・」と外から鬨の声をあげて、なだれこんで入ったのです。

なにぶん突然のことで、城は大嵐のような火に包まれてしまいました。政も「いまはこれまで」と思って、自分の部屋に、小姓(おそばつき)二人を呼び寄せて、自害しようとしていると、そこに山田兄弟が刀を抜いてあらわれました。

「おう、殿、この上は自害されよ。お首はそれがし等が頂戴つかまつる」

というと、政は、鬼のように怒って

「おのれ！ 不忠者めっ」

と言いながら、立ち上がって持っていた刀で、二人に斬りつけました。

「殿あやうし」

と二人の小姓が山田兄弟に襲いかかっているうちに、政は煙の中を潜って、城の後ろ森の中に逃げ込みました。

この間に、四郎左衛門らは小姓二人を斬ってすて、血刀をひっさげて山の中に入ってゆきました。

山の中を探していくと、一人の年取った百姓に出会いました。

「いましがた、錦の美しい着物を着た人が、森の中を歩きました」

と言ったので、

「さてはそれが、丹後守に違いない」

と、兄弟のあとをつけて行って、ついに追いつき、政の首を上げてしまいました。

時に明応七年も年の暮れの二三日、政はまだ二一歳の若桜でありました。

こうして佐世保一帯は、平戸の松浦の領地になってしまいました。

丹後守の妻の「南の方」は、城が落ちた時、まだ一歳の幸松丸(こうしょうまる)を抱いたまま、敵に捕らえられ、平戸に送られました。

弘定は、親子を河内(かわち)に新しく家を作って、すまわせました。世間では、これを「河内どの」といっていました。南の方はいくども自害しようと思いましたが、幸松丸の行く末のことを考えて、思いとどまりました。

あちこちに散っていた大智庵の丹後守の家来たちは、幾度も、河内に忍び込み、親子を奪い返そうとしましたが、そのたびに見つけられて、失敗してしまいました。

肥前守の老臣井関兵部(ひょうぶ)は、殿様の前に現れ、「幸松丸と、黙って河内におくのは、虎の子を養っているようなものです。はやく双葉のうちに絶やさねば、後には、どのようなお家に仇をなすかもしれません」と言いました。

けれどもなにぶんにも南の方は、その頃の九州の強い大名の小弐氏(しょうにし)からきた人でしたので、その勢力を恐れて、たやすく手を出しかねていました。

南の方もうすうすこのことを悟って、有田の唐船城(からふねじょう)に落ち延びている庄山、池田の二人の家来のところに使いをやりました。庄山・池田からは「今福のお祭りの時は、かならずお二人をお迎え申しますから、このとき今福まできてください」と返事をやりました。

毎年十一月一五日には、今福の神社の秋祭りで、近国からもたくさんの人々が集まって、賑わいますが、この神社は、大智庵城の氏神さまでもあったのです。

南の方は、「幸松丸の運が開かれますように、お祈りしますので、今福の秋祭りにやってください」と弘定に願い出ました。

弘定は「これはどうしたものか？」と困っていると、兵部と籠手田左エ門(かごてだざえもん)がこれを聞きつけ、「親子を河内から外へ出すのは、虎を野に放つようなものです」と留めましたが、もとの氏神への参詣とならば、許さないわけにはいきません。

とうとう、二人を守るということで井関兵部が、いっしょについていくことにしました。

兵部は途中の道で二人の乗っている駕籠が止まるたびに、幾度か殺そうと刀の柄に手をかけましたが、あどけない幸松丸が、桃の花のように美しい南の方に抱かれて、駕籠のなかで眠っている様子を見ると、どうしても手を下すことは出来ませんでした。

祭りの日の今福の町は、踊りの出し物や、店、人の波でごった返していました。幸松丸親子が拝殿の前にお参りして、石段を下っていると、物陰にかくれていた、四・五人の虚無僧が走ってきて、二人を取り巻きました。編笠をとった二人は、庄山、池田でありました。

「さては、曲者」と、井関兵部が刀を抜いて、庄山に斬りつけると、身体をかわしたので刀は「はしっ」と神社の鳥居に突き刺さってしまいました。そのすきに池田は刀を抜いて、兵部の肩に斬りつけ、兵部はその場に倒れてしまいました。

こうして親子は、有田の唐船城に移りました。

月日は流れて幸松丸十五歳の時、元服して、丹後守親(ちかし)と名乗り、古い家来たちに迎えられて、相浦の飯盛山に城を築きました。ときに永正九年のことで、めでたく父の後をついで、佐世保一帯を治めるようになったのであります。

第9話 「亀の城」

ツツジで名高い諫早市の諫早城の跡は、目の下には、一望に広がる長崎県第一の米どころの諫早平野を見晴らし、はるかむこうには、むらさきの雲仙岳がそびえていて、目の覚めるような眺めです。

めづらしいヒゼンマユミの木も茂っていますが、その側に、まためづらしく背中に高い石塔を背負った、大亀の塔がたっているのです。

この塔は昔建てられたもので、このお城の別の名を亀の城と呼ばれるのは、この亀から来たものであります。亀は昔から諫早の、まもりとさえいわれてきました。

これについては、次にお話するようないわれがあるのです。

文明年間といえますから四七〇年も前のことです。南高来の西郷村に、西郷石見守尚善(なおよし)という豪傑がいました。

あるとき、俄に諫早に攻め寄せてきて、ここいら一帯を切り従え、お城を築きました。

そののちのことです。大渡野村(おおわたのむら)で指しわたし二尺もありそうな大亀を二匹もとらえたので、殿様の尚善のところへ、献上してきました。

「これは大きい。めでたいものじゃ」

と、尚善はその日がちょうど、なくなった父の忌日(きじつ)にあっていたので、

「亀は万年も生きるというから、どうか長生きして、お城をまもってくれ」こう言って、背中の甲羅に父の戒名をほりつけて、半造川に流しました。

それからいく年かしてからのことです。

おとなりの佐賀藩の軍勢が俄に有明湾にそくて、攻め寄せてきて、城を囲んでしまいました。

そうして夜があけたら、あすはいよいよ総攻撃にかかろうと、陣を敷いていると、夜の間、お城がむくむくと文福茶釜のように、にわかには高く盛り上がってきたのです。これをみた敵は驚いて、矢を放ってみても、高くとても届きそうにもありません。

「おやおや・・・」と気味悪がって、囲みをといて逃げ出してしまうしました。

「大亀が、背中にお城をかろうて、助けたとバイ」
諫早の城下の人々は、誰言うもなくこう言いました。

尚善の孫の純堯(すみたか)は、生まれつき豪胆な人で、勢力も次第に強くなり、島原の有馬、大村の大村理仙純忠(おおむらりせんすみただ)、などと肩を並べるようになりました。武雄の後藤貴明や、平戸の松浦と示し合わせて、鈴田の峠を越えて、しばしばおとなりの大村領にも攻め込みました。

あるときのことです。純堯(すみたか)が家来を連れて守山村の東目(ひがしめ)に狩りに行って、その帰りがけに半造川のほとりを通っていると、二匹の大亀が甲羅を干して気持ちよさそうに寝ているのです。

「ほお、めずらしい大亀じゃ。あれほどあれば、人をとって食うかもしれん。いまのうちに射殺してしまえ」

と家来に言いつけると、お側付の主水(もんど)という者が、

「どんでもない、あれはもしかすると、御祖父(おんそふ)さまが、お放ちになったという亀かもしれません」といいました。

「やかましい、なめとるな」と言って、純堯は、もっていた強弓(ごうきゆう)を引き絞って矢を放ちました。亀は甲羅の真ん中を射抜かれて、首を長く出し、三べんくるくる回って倒れてしまいました。

すると、生き残った方の一匹が、涙をポロポロとだして泣き出しました。さすがの純堯もかわいそうになって、その亀を川に放たせ、死んだほうの亀は家来に持たせて、城へ帰って来ました。

そうしたら甲羅をみるとどうでしょう。

甲羅には戒名がほりつけてあるのです。

「さては、ほんとうに祖父の放った亀であったのか」と、その死骸は、お城の片隅に埋めました。

川に放たれた亀は、そのまま川の中に大きな穴を掘ってすんでいました。

あるとき川内町の源八という男が、この穴を探そうと、半造川に飛び込むと、やがてその亀が源八を背中に乗せて、ポツカリ水面に浮かんで来たそうです。

天正十五年(1587年)になって、秀吉は天下を平定しようと、大兵をつれて、鹿児島島の島津征伐に下ってきました。この時、大村も有馬も、ほとんど大部分の殿様たちは、その召しにおおじて、手下になりましたが、きかぬ気の純堯だけは、どうしても言うことをききませんでした。

そこで、秀吉は怒って、佐賀の龍造寺家晴をやって、諫早を攻めさせました。本明川の水を赤く染めて戦いましたが、純堯は大敗して、お城も家晴にとられてしまいました。

大亀の祟りばい・・・人々はこう言いました。いま諫早市の紋所の「かめ」も、この話にちなんだものであります。

第10話 「火たき崎」「王子の五郎」「わらしべ長者」

「火たき崎」

宇久島の平村の飯良郷の海岸には、「船がくれ」「火たき崎」と呼ばれる入江があります。五島家(ごとうけ)の先祖の、家盛公(いえもりこう)が初めて、上陸されてところであります。

家盛は、平の忠盛の次男でありました。京都で従五位の下くらいまで進み、右馬頭(うめのかみ)に任ぜられていました。文治五年(ぶんじ)のことです。花のように栄えていた平家一門が、長門の壇ノ浦の合戦に敗れ、みな海に入ったり、ちりじりに落ち延びたという知らせが伝わってきました。

家盛も「今は九州に落ち延びるしかない」と思って、家来の藤原河内守久道など十九人をつれ、和泉国までくだり、船に乗り瀬戸内海を渡りました。ときに文政二年も十一月十五日。吹く秋風は冷え冷えと身に寒くありました。こうして今の関門海峡をわたり、玄界灘をこえて平戸にたどりつきました。

このときはもう文治二年もくれ、年も開けて桜が山々に蕾を開いていました。平戸では「むこうに五島という大きな島がある。島の数も多く、土地も超えているから、そこをお開きになったほうがよかろう」と進めました。

そこでいよいよ「五島にいこう」と船に乗ったのが、三月二六日の夜明け方でした。

望みに胸を膨らませていた人々は、海上でおもわぬ大嵐にありました。

そこで今は運を天に任せて、波の上をただようていると、向こうの方に美しい緑の島がみえて、島影から、煙が立ち上るのが見え

ました。みんなはそれに力を得て、船をその島の入江に乗り付けました。

そのの浜には海人たちが火を焚いているところでありました。一同が濡れネズミのようになって上がってくると、海人たちは外から船が見えないように、船を岩の間に引き入れ、火にあたらせたり、ぬれた着物をかわかせたりしました。また、ご飯を炊いてきて、一同にすすめました。

久道が、目ざとく家盛の前に飯を山盛りにもって差し出された茶碗を見ると、それは縁が少しかけていましたが、模様は鶴の舞っている様が描かれていました。

「おお、殿。おめでとうございます。この茶碗は舞鶴の絵、殿の御運がひらける兆しでございます」

といいました。

家盛も扇を開いて、「いかにも、めでたい」と喜びました。

家盛は翌日は宮の首に出て、神様の祠を作り、例のかげた舞鶴の茶碗を備えて、神を祭りました。

二九日になると、平の本村から代表の百姓たちがたくさんやってきて、一同を迎えました。

こうして家盛たちは晴れて平村にのりこみ、ついにこの島一帯はその領地になったのであります。

家盛はのちになって、宮の首に、はじめてかげた茶碗をあげて神を祀ったところに、八幡宮を建てましたが、そのお祭りの日には、五島の島々、壱岐、対馬からも船に乗って、人々が集まって賑わいました。

自分を助けてくれた海人たちには、五島一帯の海岸で長く、自由にあわびをとることを許しました。

こうして福江島にわたるまで五島家は、家盛から七代の間は、この宇久島にいたのであります。かの火たき崎には、「家盛公上陸の地」の石の印がたっています。

「王子の五郎」

むかし鯨伏村(いさふしむら)に王子の五郎(おうじのごろう)という人が住んでいました。

この人は聖武天皇(しょうむてんのう)さまの第5番目の王子でした。生まれつきの勇気のある強い人でしたが、天皇様のご命令で、仏像を持って遠い壱岐の島にわたってきました。

そうしてこの村の立石というところいすんで、島全体をおさめる国司(こくし)という役について、暮らしていました。

ニワトリを育てるのがすきで、ニワトリの小屋を作って、たくさん育てていました。島中の貢物もあつまってくるし、大層なお金持ちになりました。

そこで、「貯めた金銀を人の知らないところに埋めておこう」と思って、あるとき七匹の馬の背中に、金銀を入れた箱を背負わせて、生野の辻まで運びました。

丘の上に大きな椿の木が会ったので、その下にうめて土をかぶせておきました。帰りに、瀧長江(かたなえ)まできたとき、金銀の箱をうづめた所を知っている召使の女が一人あったので、これが気がかりでしかたがありません。

王子はいきなり、この女を海のなかに突き飛ばしてしまいました。女は恨めしそうな目付きをして「朝日てる、夕日輝く白椿の下」と歌って、波にまきこまれてしまいました。

それから例の丘の上の椿の木は、朝になると葉も枝も、まぶしいほど銀色に輝いたそうであります。

ニワトリの小屋の卵を蛇があらわれて、盗むようになってきました。そこで王子は「蛇をひどい目にあわせてやろう」と思って、木で作った卵を、小屋の中に入れておきました。蛇は知らずにそれを飲んだので、お腹に使えて、そのまま死んでしまいました。

これからというもの、日照りが続いたり、大雨が続いたりして、島中の畑の作物は、すっかりとれなくなってしまいました。

そこで王子は、剣に蛇のまきついた形を石に刻みつけて、村の神様にあげました。これはいまでも熊野神社の境内に、たっていて、村の人々は、「蛇神」とよんでいます。こうして王子の子孫は二十代も続き、みな王子の五郎と呼ばれていました。

立石の飛越(とびげ)には、その墓というのが残っています。またこの浜辺には、お経文を一字ずつ書いた浜石がたくさん落ちているそうであります。

「わらしべ長者」

昔ある所に、貧乏人と金持ちが、隣り合わせに住んでいました。金持ちの家は三階建てで、庭のお池には噴水があがっていました。貧乏人の家は、古ぼけて少し傾いていました。金持ちには美しい一人の娘があり、貧乏人にも一人の息子がいました。この息子があるとき金持ちのところに行って、

「おうちの娘ごさんを、私の嫁さんにくださるわけにはゆきますまいか」

といいました。

長者はしばらく息子の顔を見ていましたが、

「おまえのごたる貧乏人には嫁にはややれん。この藁しべ一本やるけど、百万長者になったらまたこい」といいました。

息子はその一本の藁しべを大事にもって、屋敷を出て歩いていくと、にわかには天気が荒れだして、風が吹いて来ました。

あるお屋敷の側を通ると、前の畑でうつくしく咲き乱れたボタンの花が、いまにも吹きちぎれそうに揺れています。

息子は畑の中に入ってきて、木片を一本たてて、もっていた藁しべを結びつけ、ボタンの花に支えをしました。

家の中で見ていたこの主人は、出てきて、軒端の芭蕉の葉を一枚ぬいてくれました。

息子はそれをもらって歩いていくと、町外れへ出ました。

今度は大粒の雨が降りだしたのです。向こうの方から味噌の入った、もろふたを担いだ「おかみさん」がやってきました。味噌に雨粒がかかって濡れています。そこで芭蕉の葉をその上にかぶせると、おかみさんは、よろこんで味噌を一塊くれました。

それを紙に包んで懐に入れて走っていくと、やがて日がとっぷり暮れてしまいました。

息子は町外れの小さな宿へ泊まることにしました。

隣の部屋に、一人の目の不自由なおばあさんが泊まっていますが、おにぎりはもっていたが、おかずを持っていないのです。息子は例の味噌を懐から持ち出して、お婆さんにやりました。

お婆さんは、「これは、おおきに」といいながら、おむすびを少し息子に分けてやりました。

そして、その味噌を一口なめると、「ありゃ、こりゃあ、塩辛か」と叫んで飛び上がり、そのはずみに、目がぱっちり開いてしまいました。

おばあさんは夢のように喜んで、翌朝息子を別れるときに、一丁のカミソリをくれました。

息子はそれをもらって歩き出し、次の日泊まった隣の部屋には、一人の浪人武士が泊まっていました。見ると髪やヒゲが伸び放題です。そこで息子はカミソリを貸してやりました。浪人武士はそれですっかりヒゲをそって、よほど気持ちが悪くなったとみえて、さしていた一本の脇差をくれました。

息子は翌日は、その脇差を差しておおいばりで両手を振って、町を歩いていきました。

すると向こうの方から殿様の行列がやってきました。

しかたがないので、傍らの道に座って頭を下げていますと、お通りがかりの殿様が、駕籠の中から、ふと、この息子の指している脇差に目を止められました。

「駕籠をとめよ」ということになって、息子はその場に召しだされ、やがて、「明日はお城へ登るように」ということになりました。

息子が翌日お城にあがってみると、殿様はたくさんのお金を出して、例の脇差をお買い上げになりました。

息子はにわか長者になって、となりの金持ちの娘をお嫁に迎えました・・・とさ。

NOCSから

いかがでしたか。これで、長崎編、諫早・島原編、五島編、県北編とあわせて合計五〇話の「長崎の民話」を配信することができました。「童話」「伝承」「説話」「言い伝え」さまざまな分野のお話を「民話」とひとくりにしておりますが、ともかくも、長崎県全域の「民話」専門の「声の図書館」として維持していきたいと考えています。

ご協賛いただいた各企業の方たちには、子供たちのためになれば・・・ということで、ご協力いただきました。

大人たちの「今の思い出に」、そして、子供たちの「未来の思い出のために」という思いで制作しております。「思い込みだけ」の無謀な企画でございましたが、未永く、これらの物語が引き継がれていくことを願っております。

さてさて、ともかくも二年の間配信を続けてきました「長崎の民話」はこれで大団円となります。長い間、聞いていただきましてありがとうございました。